

向井先生を偲ぶ

名古屋工業大学名誉教授 齋藤勝裕

私は4年になるまで向井先生の講義を受けたことは無かったように思う。学部3年の冬頃、そろそろ希望配属講座を決めなければならないという頃に、鈴木利助、佐藤賢治、後藤勝喜、それと私の4人は一緒に恒例の研究室巡りをした。配属してみたいと思う研究室を訪ねて、教官にその研究室の研究内容、特徴、雰囲気などを尋ねるのである。

A 研究室訪問

有機化学が面白いかなということで、天然物の中西研に行った。助手の先生が「我々は世界の化学をリードしているんだ」と熱っぽく語って下さった。分子軌道も面白そうだな、ということで中島研に行った。丁度中島先生がいらして「パチンコと量子化学の関係？とか、女性とプレゼントの関係？とか」をフンワリニコヤカに語って下さった。もう一研究室をとということで有機第一の向井研に行った。向井先生がいらして「アッチは頭が悪いんで、他の人と違う領域で勝負しないといけないんで、光化学をどうのこうの」と、もう一つ活きの上がらない話をして下さった。

どうする？中西研は疲れそうだな、中島研は正体の分からない所があるし、じゃ、向井研か？という、あまりハッキリしない理由ながら4人一致で選んだのが向井研だった。

配属になると、向井研には紳士然とした助教授の戸田先生、助手の鶴田先生、同じく助手でこちらは反紳士然とした手塚先生が待っておられた。先輩にはドクターの赤崎さん、木村さん、佐藤さん、マスターに新田さん、倉林さん、須川さん、富沢さんがおられた。新四年は私たち4人の他に松原君、中野君が加わって6人になっていた。

6人はそれぞれ別々の指導者に着いて研究を始めたが、私が着いたのは手塚さんだった。慣れた調子で実験の手はずを指示してくれるが

抽出の後、「それを洗って乾燥しておいてくれ」と言われて「んん？」となったのを憶えている。洗濯ものじゃあるまいし、ベンゼン溶液を「洗って乾燥」とは何のことだ？それが、「分液ロートに水と一緒に入れて、振って分離した後、ベンゼン層に乾燥材を入れて置く」ことだと分かったのは先輩に聞いてからの事だった。

手塚先生は中々破天荒な方で、頭脳は明晰なのだが、好きな落とし噺に品が無くて、合わせるのに苦労した覚えがある。スキーの準指導員の資格を持っておられたが、きっと重心が低いせいだと、4年生の間では納得していた。

B アレルギー

その頃、赤崎さんと二人部屋で実験を始めた利助さんの調子がオカシクなった。もともと痩せているのに更に痩せ、目が血走って、なにやらゴホゴホと咳をする。向井先生も心配なさってもしや結核でも？ということで、大学病院で検査した。結果は扱っている化学物質、トロポンエチレンケタールによるアレルギーだった。一緒に部屋で一緒に化合物を扱っているのだから、赤崎さんもオカシクなったら化学物質を疑うのだが、赤崎さんは何事も無くコロコロと元気に太っている。アレルギーは人によるものだということが良く分かった。

数年後、オカシクなったのは木村さんだった。あらぬところが炎症を起こして痒くなったというのである。身に覚えがあるのか無いのか、大学病院でペニシリンを打って来たとの噂が立った。木村さんの名誉のために言っておくと、これもアレルギーだった。トロポンと塩化チオニルの反応物はカブレを起こすので、この反応を行った者はトイレに行くときは「手を洗ってから行く」のが鉄則であった。

しかし木村さんはその様な反応をしていない。だから油断をしたのだろうが、落とし穴は何処にでもある。木村さんは研究室に置いてあったシュラフ（寝袋）で寝たのである。そしてそのシュラフで木村さんの前に寝た人が、そのカブレ反応を行っていたのである。

C 毒ガス

アレルギーではないが、私も危険な実験を行ったことがある。ドクター1年で行ったジシアノアセチレンの合成である。これは猛毒気体で鳴るホスゲンを原料とする。当時ホスゲンの小売りはなかった。試薬屋に聞いて見るとタンクローリーなら手配できるという。ホスゲンをタンクローリーで買ってどうするというのは？戦争をするわけではない。しかたが無いので焦性硫酸と四塩化炭素（だったと思う）で作る事にした。危険物、まして気体の危険物をいじる時はドラフトで行う。

ところが、この頃の化学科は片平にあった。堂々として一際目立つ立派な建物だったが設備は旧式である。なんと、ドラフトが「信用できない」というのである。毒ガスをいじったらドラフトの配管を通して他の実験室に漏れる可能性があるという。実験後、化学科全体が静まり返ったらどうなるのだ？ということで、天気の良い日を選んで建物の屋上に机を持ちだし、そこで実験を行った、勿論、例のドクロのような外見のガスマスクを着けてである。私は勿論、一緒に実験をした4年生の山下君も目が悪い。ところがガスマスクは眼鏡の上からは装着できない。二人でなかば手探り状態で実験をしたのを覚えている。

発生したホスゲンはすぐに反応させて生成物にするが、そこから先は細かい実験になるので屋上では無理である。狭い実験室に戻って行うことになる。しかし未反応のホスゲンが残っていると危険なので、ホスゲンを感知する装置を設置しなければならないとの向井先生のご忠告である。有難いことに向井先生がいろいろと調べて下さって、結局カナリア？を飼うのが良いということになった。カナリアは鼻が利くので異物の匂いに反応するというのである。「カナリアが倒れたら逃げべし」ということで実験を始めた。

「しかし」、というのが向井研らしい。「カナリアは高価なので研究費で買うのは難しい。文鳥で我慢してくれ」ということで、研究室の天井から鳥かごを吊るして文鳥とともに実験した。文鳥が「アイツラが倒れたら逃げ出そう」と思っていたかどうかは知る由も無い。

D 恒例の実験

4月に新学期が始まって実験室の掃除が終わると、実験台にスペクトルグレードのエタノールの500 mL瓶が数本並ぶ。恒例の抽出実験である。イチゴを用いると赤く美しいイチゴ酒ができる。数週間後には実験の後処理である。蒸留水で希釈してグルコースを入れると結構美味しい。ある年、毎年イチゴ酒では進歩が無いと言うので赤紫蘇を使った。さすがにピュア100%のエタノールである。ほとんど真っ黒の赤紫蘇酒ができた。この色では飲み難いと言うので活性炭で処理することになった。さすがである。真っ黒だった液体が無色透明になった。色にビックリして香りがどうなったかは覚えていない。

片平の研究室から広瀬川までは歩いて10分くらいであり、途中に釣り道具屋があった。実験室には釣竿が何本も立ててある。リフックス何時間などと言う実験では装置の温度が恒温になったら、白衣のまま釣竿を担いで広瀬川である。河原にはオッチャン達が鮎のゴロカケを行っている、鑑札を持たないこちらは釣り道具屋で買った赤サシを着けてオイカワ釣りである。20~30匹釣った所で研究室に帰り、ハサミで調理してオイルバス用のオイル（当時は大豆油であった）でテンプラにして酒のつまみである。

テンプラに飽きた時には器具乾燥用のオーブンに並べて焼干しにする。味噌汁にすると良い出汁が出た。向井先生のお気に入り、教授室に生協から失敬したお椀で味噌汁を持って行くと大層喜んで下さったものであった。

向井研は釣り好き、魚好きが揃っていた。夏休みは三陸へ釣り合宿である。釣りの責任者は漁労長であり、それは新たに加わった助手の宮仕先生の指定席である。料理の責任者は料理長であるが、私はそれを3年間務めた。

釣り合宿の前には関上浜で地引網である。ハゼ、ボラなどが主な獲物であるが、漁師さんの思いやりか、クロダイやスズキも入っていたものである。ある年、見慣れない魚が沢山入っていた。サンマを引っ

張って細くした様な魚で、漁師さんに聞くとダツだという。「野菜と煮ると食えるよ」ということだが、ということはそれ以外では「不味くて食えない」ということなのだろう。

持って帰って研究室で焼いて食ったが、確かに食欲がわかない。隣の伊東研に「オミヤゲ」だと言って上げた。翌朝ゴミ箱をみたらソックリ入れてあり、「ああ、伊東研でもダメだったんだ」と妙に納得したものであった。

E ディベート

有る時、阿弥陀で集めたお金で買った駄菓子を食べながら、お茶を飲んでいる時に、なんの弾みか、「高野豆腐は美味しいかどうか？」ということでディベートとなった。ある者は「あの滲みだす旨さはスバラシイ」というし、ある者は「あの日向臭い匂いには参る」と言うし、で中々決着がつかない。

喧々囂々とやりあっているうちに向井先生と戸田先生が聞きつけて実験室に来られ、興味に駆られてディベートに付き合っ下さった。丁度良いことに、片方は旨いと仰り、もう片方は不味いと仰った。結局論争に決着はつかず、行司役が下した軍配は「高野豆腐はスポンジであり、それ自体に旨みは無い。旨みは料理によって醸されるのであり、上手な料理人の高野豆腐は美味く、下手な料理人の高野豆腐は不味い」ということになった。

向井先生と戸田先生、どちらが不味いと仰ったのかは奥さまの名誉もあるので、ここでは言えない。

私の知っている向井研の思い出はこの辺までである。その後私は名古屋工業大学へ赴任して仙台を去った。その後も向井先生にはことあるごとに教えを乞い、先生の生涯を通じてお世話になった。15年ほど前に拙宅へお越しになったことがあり、お酒をお奨め出したが「医者に止められている」ということで、一滴も御飲みにならない。口寂しいのか、唇の近くまでは持って行かれるが、決して御口を着けない。

結局減ったのは蒸発した分だけであった。次の年の年賀状に「酒を辞めたが、変化が無いので禁酒は止めることにした」と書いてあった。さすが実験化学者と改めて尊敬の念を深くしたものである。私のような、「実験もしないで禁酒の効果をバカにする」者とは大変な違いである。

思い出すままに書き連ねたが、書いているうちに楽しくなり、あれもこれもと思い始めた。人生の一時期、この様な生涯忘れない楽しい思い出を作ることが出来たのは向井先生の広く、深い思いやりの御心のせいと、改めて感謝の思いを深くするばかりである。

向井先生、ありがとうございました。

合掌